

「日中植林・植樹国際連帯事業」2018年度中国大学生訪日団第2陣 参加者の感想（抜粋）

第1分団（1・2号車）

○今回の数日間にわたる訪日活動を通して、これからの仕事や生活の手本にしたいことが二つあった。それは日本人の災害に備える防災意識の高さと、自然と共生する理念である。日本は島国で、山地が多く、活火山が点在しているため、多くの自然災害に見舞われて来た。自然災害の前で人間は非力であり、災害に備えた事前準備や憂患意識を高めることが日本においては非常に重要とされている。日本ではAED装置が至る所にあり、防災体験館も多い。また、学校では避難訓練を定期的に行い、都市部のビルには非常階段の設置やベランダ用避難はしごなどが装備されている。こうした生活の様々な面で、防災意識の高さを知ることができた。私の住む天津は平和で安全な、自然災害も少ない都市であり、生活をする上であまり危険を感じない。中国の他の地域で自然災害が発生しても、自分の命が脅かされるような緊迫感を感じることはあまりない。しかし、自然災害に劣らず、人為的事故も非常に恐ろしい。天津812大爆発事故（2015年）などに思いを馳せると、自分が生活する都市の地理や生活環境を理解し、潜在的危険を認識し、事前に的確な予防措置を取ることが非常に重要だと思う。上智大学の井上教授の講座への参加や、鹿児島での体験を通し、習近平総書記の提唱する人類運命共同体の創設の意義を深く感じた。人間は無人島で生きることはできないし、自然や他人に依存せずには生きられない。これは国と国の間でも同様だ。私の住む地域でも自然教育、自助と共助の教育をしっかりと行い、人と人、人と自然の間の結びつきを強め、防災と共生の意識を高めていきたい。

○今回の活動で視野がさらに広がり、全面的な角度で問題を探ることを学んだ。例えばゴミ分別に関して、日本の詳細にわたる分別、回収率の高さは非常に素晴らしいことだが、それに付随する問題にも気が付いた。ゴミの分別が細くなるほど、それを納めるためのビニール袋なども増えるのだから、それがまた汚染をもたらすこともある。そうした観点から考えると、ゴミを分類することが果たして完璧なのかと考え、あるいは改善の必要もあるのではと思った。

また環境や防災に関して、日本は自国の実情に基づいた経験を有しており、そのため、災害前の予防措置を非常に重視していることを知った。実体験は防災意識を強固にし、その意識が、さらなる注意の喚起につながる。こうした意識の高まりが、関連する作業をより順調に進めることが分かった。

そして、共に参加した団員は皆、非常に優秀で、団員同士の交流も研鑽の場となり、彼らの考えから多くを学んだ。

最後に、今回の訪日で習得したさまざまなことを必ず家族や友人と共有し、中日友好に自分なりの貢献ができればと思っている。

○日本は地震や津波の多発国だが、被害者数はできる限り低く抑えられている。それには理に適った根拠があることが、日本に来て分かった。日本でそれほど多くの人々に出会ったわけではないので、個々人の防災意識については良く分からないが、国家としての防災や救助に関するハード面、

ソフト面での取り組みは、わが国を凌いでいた。例えば、日本には多くの科学技術の普及を兼ねた防災体験館があったり、AED が至る所に見受けられたりした。中国がまだ及ばず、異なる部分だと感じた。またホームステイを通して、両国民には思いやり、勤勉、分別ある道徳観などが共通していると思った。その中で異なる点を挙げるなら、日本人は更に細やかで、真面目だった。「詳細が勝負を決める」と言われることから、我々はこうした点を学ばなくてはならないと思った。また、私を見る限り、道行く日本人はとても忙しそうで、逆に中国人の方が元気で、リラックスしているように見えた。中国を出発する前に王占起団長が説かれた「遠くの親戚より近くの他人」の言葉の意味が良く分かった。両国には多くの共通点があると同時に、相互が手本とし合うべきところもあふれていた。両国関係がさらに密接となり、両国民の友好がより強固となるような基礎固めを行うため、我々は最大の努力をしていく必要を感じた。

○今回の訪日活動に参加し、防災分野での視察や交流を通し多くの知識を得た。その中で最も印象深かったのは、バスの運転手さんだ。我々が皇居の見学後バスに戻ると、外がいくら暑くても、省エネと排ガス排出削減、そして環境保護のため、待機時間にクーラーは付けないのだと、運転手さんが言った。環境保護というのはもっと大きな概念だと思っていたが、この運転手さんのように自分のできることから着手するという責任感は素晴らしいと思った。これからの生活において、この運転手さんや上智大学の井上教授が話されたように、身の回りのことから、例えば路上の小さなゴミを拾うことから始めたいと思った。

また、ホームステイでは、一泊二日の短時間であったが、お母さんがいろいろな体験をさせてくれた。忘れ難いのは海辺で貝殻を拾ったことだ。お母さんが私たちの写真を撮ってくれ、その中でとても可笑しい写真があり、私たち四人はお腹を抱えて大爆笑、海風に乗って笑い声が響き渡ったその瞬間は一生忘れられない思い出になった。皆で一緒に夕飯を用意し、相撲を鑑賞しながら、和やかで楽しいひと時を過ごした。二日目の朝、早起きして海岸で日の出を見た。そして、山にも登り、自然を愛でた。お別れの時、バスの中の全員が、ホストファミリーの皆さんに向かって大声で「ありがとう」と叫んだ。心から湧き出る感動の叫び、愛情に満ちた声を耳にして、目頭が熱くなった。ホストファミリーと連絡先を交換したので、これからも連絡を欠かさず、また会えたら良いと思う。

中国と一番異なると思ったのは食事だ。日本では冷たい食べ物が多く、一週間たっても余り慣れることができなかった。日本人の他者を思いやる気持ち、細やかさ、環境保護に寄せる強い思い、防災意識など、私たちがしっかり研究し、深く学ぶべきだと考える。

○今回の訪日活動では多くの成果があり、それらを紹介したい。

1) 上智大学と鹿児島大学の模擬授業を通し、私たち若者が環境危機に直面する上での勇気と態度を認識することができ、生態環境は短期間では改善できないことを学んだ。勇気と実行が融合されてはじめて、生態環境に対する正確な認識を持つことができるのだ。また専門家の学問への徹底した情熱、真理を渴望する意識の高さ、環境改善に寄せる意気込みには非常に感動した。環境変化は中国のみならず、日本、そして全世界が直面する課題である。我々は全人類の死活問題に目を向けなくてはならない。

2) 環境改善の道程は長く険しく、焦りは禁物だ。日本の環境が改善された背景には、長い時間をかけ改善の歩みを促進させてきた過程がある。汚染に苦しむ中国も、各世代の人々の努力により、必ず明るい未来が待っている。

3) 環境保護に寄せる日本人の意識と質の高さは世界でもトップレベルだ。中国のゴミ処理と分別問題をスムーズに解決していくには、やはり日本から学習する部分が多い。その考えを各家庭に浸透させ、教育と結びつけることが大切だ。

4) そして古い建築物の保護や伝統文化の継承も非常に重視していた。

○今回の訪日活動を通し、日本が環境や防災において非常に深く研究していることが分かった。日本科学未来館の見学を通し、未来の視点から現在の環境や資源の問題を解決しようとする考え方に触れた。環境関連の講座や授業で、日本の環境や防災に対して理解を深め、日本人がこの分野をどれだけ重視しているかを知った。

交流は活気があり楽しかった。上智大学、鹿児島大学の学生たちと交流し、連絡先を交換し合い、皆の友情、中日交流に抱く期待、中国文化に寄せる思いを感じた。日本人は礼儀正しく、決まりを守る国民で、人々も環境も素晴らしい。日本ではスーパーマーケットでセルフレジが導入されたりと迅速に先進技術が普及している。もちろん、中国にも便利な無人スーパーなどがあるものの、それらが普及する前に、日本の多くの設備から学び参考にする点が多くあると思う。

日本では公共交通を利用して、店で買い物をしても、接客態度の真面目さと礼儀正しさにはとても感心した。閉店間近なのに、会計が終わるとお客を出口まで見送りする至れり尽くせりのサービスは素晴らしい。ほかにも設計コンセプトや、真摯な精神など、見事だと思うことが多かった。

日本で仕事や留学をしている中国人はとても多い。中日友好が両国の発展を推進する鍵となるだろう。私たちの世代は友好を発展させる重要な使命を担っている。

第2分団（3・4号車）

○日本の耐震技術に関する知識は、主に中国で書籍や先生から教わったものだったが、今回、宮崎東諸県広域防災センターの視察を通し、地震発生時に室内がどのような法則で揺れるのか体験できた。実体験のない大学生にとって、理論と現実を結びつけることができる良い機会となった。帰国後、先生やクラスメートに、理念と現実はずいぶん合致しないと学んだことを伝え、チャンスがあればシミュレーションに参加してみよう勧めたいと思う。

このほかに、東京都環境公社 埋立処分場への視察も印象深かった。埋立処分場はハエや異臭が立ち込める場所ではなかった。そして、日本におけるゴミ処理対策は徹底されており、路上にゴミ箱はほとんど設置されていないし、また路面からホコリが立つ心配もなかった。こうした半ば強制的なゴミ処理方法が国家の持続可能な発展とエコなる未来を作り上げていた。中国ではこれらの考え方は未だ普及しておらず、ゴミ分別の意識は相対的に低い。帰国後には自分が率先して手本となり、ゴミ分別を広めていきたいと思う。

中日関係は常に人々が関心を寄せる課題であり、友好協力や交流は広く行われている。しかし一部の歪曲された報道により、両国国民の間に誤解が生じていることも事実である。今回、宮崎県小林市のホームステイでは、言葉の壁を乗り越え、懸命に交流した。日本の皆さんは中国との友好関

係、両国の共同発展を心から望んでいることが良く分かった。Tさんのご家族は温かく、真面目で、親切だった。日本のほとんどの家庭もきっと同じだと思う。帰国したら、日本で得た友情、感動、知識を必ず周りの人に伝えていく。最後に、多くの学びを得たこの素晴らしい訪日活動を主催してくれた日本側の皆様の行き届いたご手配に感謝を申し上げたい。

○今回の訪日活動は印象深い。宮崎東諸県広域防災センターでは消防員の皆さんの士気の高さに圧倒された。消火器の使用方法、濃煙避難体験、地震体験車、はしご車への試乗を経験した。今後、もし災害に遭遇した場合、迅速で適切に自分の安全を守ることができると思う。

東京都環境公社 埋立処分場では日本のゴミ処理の過程を学び、中国が学ぶべき点を多く発見した。日本の埋立処分場には花や樹木が植えられ、異臭もなく、まるで観光地のように整備され、ゴミ処理場とは到底思えなかった。ゴミ処理において中国はまだ日本に後れを取っている。中国では14億の人々が毎日、膨大なゴミを出しており、日本の成熟した経験を手本にしながら、効率よくゴミ処理問題の解決に取り組むべきだと思った。

ホームステイでの交流を通し、日本人が環境を非常に重視していることを知った。お世話になったお宅は農業を営んでいるが、化学肥料は一切使用していない。私たちに「中国も農薬や化学肥料を使わないようになれば良いのにね」と話されたが、その点に私はあまり同意できなかった。なぜなら、中国は全世界の7%の耕地を有するにとどまるのに、全世界の20%の人口を養わねばならず、その上、20世紀には深刻な凶作にも見舞われている。外国の人は、中国人が食糧生産量に非常に関心を持っていることをあまり知らないだろうが、仮に中国で農薬や化学肥料を全く使わなかったら、中国人の最低限の食生活を守るという命題（温飽問題）は果たせない。日本の食糧自給率も長年にわたり40%程度であり、日本にとっても食糧生産量を保証することは最重要課題であると思う。こうした点を考慮した上で、農薬や化学肥料を減らすことは意義があると思う。そのため、薬品使用量を減らしながら生産量を上げる研究がますます重要だと考える。

帰国後は、私が感じた日本をありのままに身近の人々に伝えたい。中日両国の交流を今後も末永く継続させ、互いに学び合い、共に発展繁栄していきたい。そして最後に、両国の友情がいつまでも続くよう祈っている。

○日本ではゴミ分別を開始した当初、決まりが非常に厳格だったと言う。規則通りにゴミを出さないと、再度、分別し直すようにゴミを突き返されることもあったようだ。そして、曜日によって捨てるゴミの種類も明確に異なっている。今年7月1日より上海では強制的なゴミ分別収集がスタートする。しかし現時点では、ゴミ分別に関する理解や普及の程度はまだ低い。日本ではこうした普及教育は小学生から高齢者までが対象であり、我々が学ぶべきだと思った。

上海や中国の多くの都市では、分別して集めたゴミの扱いが簡単で手荒く、それらを一緒にして埋立てたり、焼却したりしてしまうことが多い。だから大気汚染、土壌汚染、水質汚濁などの問題が発生してしまう。日本では可燃ごみ、粗大ごみ、金属ゴミなどを分別した後、リサイクル利用できるものは再分別し、市場に戻され再利用されている。もう価値の無くなったゴミでさえ、適切に無公害化の処理を施している（日本製品はそれ自体の毒性が低いのかも知れないが）。こうすることで、美しい山河、心地よい青空が保たれているのだろう。

中国では賑やかな大都市、田畑の広がる農村、いずれも非常に騒がしい。しかし日本人は小声で話し、会釈やお辞儀を忘れず、社会が静かで秩序や調和に包まれていた。自分も含め、こうした点は中国人が改善させる点であると感じた。

○訪日交流活動で、我々中国大学生訪日団は東京都環境公社 埋立処分場を参観し、ゴミの分別処理の方法を学んだ。日本ではゴミ分別は詳細で徹底した処理が為されており、この点は我々が学ぶべきだと強く感じた。これからの学習、仕事、生活において、環境保護の考えを積極的に周りの人々に説き、意識向上のために尽力したい。ゴミの分別、再利用可能な紙類は資源としてリサイクルする、そして「豊かな自然こそが富である」の理念をしっかりと心に刻むべきである。宮崎東諸県広域防災センターでは、防火や耐震などの訓練を通して、日本で発生した大地震の威力を目の当たりにした。たった一分間の地震体験車で体験であったが、地震というものを経験したことのない私にとっては、非常に忘れ難い思い出となった。防災センターでの体験から防火、耐震に関して多くを学んだ。帰国後は、災害に遭遇した際に自分たちの大切な命を守るため、こうした防災減災の知識を周りの人々に伝えていきたい。

○環境を専攻する大学院3年生として、環境と防災分野の学びに期待し、大きな成果があった。

中国で日常生活を送る私は、ゴミ分別に関する意識がまだまだ薄かった。今回の活動を通して、その重要性をより身近に感じられるようになった。四川省では各大学がゴミ分別の試験地点に指定されており、国家の提唱のもと、私の大学も積極的にゴミ分別活動に励んでいる。帰国後は、自分で撮影した写真や動画を紹介しながら日本の状況を適切に紹介し、クラスメートや学部の学生たちに、ゴミ分別の理解をもっと深めてもらいたい。同時に日本人の友好の思いも学校に持ち帰りたいと思う。そして、防災も重要な課題の一つである。私の大学は四川省綿陽にあり、龍門山断層上に位置するため地震が多発し、日本との共通点が多い。今回、地震体験車で大型地震シミュレーションを通じ、さらに多くの防災減災の知識や技術を学んだ。今回の訪日活動で習得した成果を必ず周りの皆に伝え、共有していきたい。

中国は迅速に発展を続けており、日本に学ぶべきところが多々ある。それと同時に、中国の発展から日本が学ぶべき点もあると考える。今回の訪問を通し、両国民は互いの友情をさらに育み、相互発展のために尽力する必要性を感じた。両国国民の友情が永遠に続き、両国がより発展するよう祈っている。

○今回の交流活動で最も印象深かったのは、非常に細かい点も疎かにしない日本人の真摯な精神だ。私たちは東京都環境公社 埋立処分場を見学したが、ゴミ運搬車の車体やタイヤは非常にきれいで、見る人に嫌悪感を与えなかった。

中国は礼を重んじる国家であり、伝統文化の継承にも力を注いでいる。一方、日本は学習、応用に秀でており、中国や西洋の文化を融合させ、日本の特色ある文化を創り出している。例えば、中国の古代木造建築を参考にした木造建造物、あるいは東京のコンクリート建築は西洋の建築構造を参照して作られていた。

今後、学習や研究において、細かい点ももたらす影響力を大事にしていきたい。中国には「細部

が成功と失敗の分かれ目」との言葉がある。今回、日本では「細部を大切にする」という点で非常に重要な学びを得た。日本人は友好的で、心優しい。両国はさまざまな誤解を解き、安定した友好の橋を築くべきであると強く感じた。